

瀬戸蔵（愛知県瀬戸市）

—陶都・瀬戸が丸ごとつまったミュージアム—

社団法人中部開発センター

企画事業部 水野 南緒

新しい観光のあり方“産業観光”が、中部圏において積極的に進められています。“産業観光”は、産業の内容を対象とする観光で、生活の中の商品・サービスが提供されるまでに、どのような歴史や技術があるのかを発見し、体験する知的好奇心にあふれた観光です。

具体的には、製造業の工場見学や、伝統産業の体験プログラム、企業博物館などがあげられます。こうした施設を訪ねる機会は、従来から社会見学や企業視察などがありましたが、特定の団体や目的に限らず、個人客や家族客などの一般観光客でも楽しめるよう門戸を広く開放していこうとするところに“産業観光”の特徴があります。

今回は、愛知県瀬戸市の「瀬戸蔵」を紹介します。



瀬戸蔵・外観

歴史ある職人の町から産業観光の町へ

陶磁器そのものを指して「瀬戸物」と呼ぶことからわかるように、長い歴史の中で日本のやきもの産業の中核を担ってきた瀬戸。古くから「職人によるものづくりの町」であった瀬戸市が、近年「産業観光の町」という新しい顔を持って、様々な取り組みやイベント・企画を展開しています。特に大きなきっかけとなったのが2005年に長久手町と瀬戸市を会場として開催された愛・地球博で

す。万博会場に決定してから「おもてなし」という意識を地域全体に浸透させ、これまで培ってきた産業を生かした新しいまちづくり・観光都市化を目指そうという指針が打ち出されました。

せと・まるっとミュージアム

その指針を推進する活動の核が、町全体を博物館に見立てた「せと・まるっとミュージアム構想」です。これは「やきものの町」というだけでなく、

やきものと共に積み上げ、育んできた伝統のある町そのものが展示室であり、地域に点在する窯や煙突などの景観も含めて、見ごたえのある観光資源であるというコンセプトに基づいた取り組みです。

具体的には、展示型の見学施設の他にも、工房体験や窯元見学、子ども向けの体験プログラムなどを充実させています。これらが連携して盛り上げているのが「7大イベント」と呼ばれる催しで、陶祖まつり、せとなつイベント、せともの祭、招き猫まつり、まるっと大回遊、陶のあかり路、お雛めぐりという7つのイベントを観光の目玉としてPRしています。この他にも「瀬戸百景」の選定、

「街角ギャラリー」の募集など、せと・まるっとミュージアムの企画は多岐にわたっています。



至るところに展示の仕掛けがある（尾張瀬戸駅周辺）

瀬戸焼き1300年のあゆみ

～やきもの産業のあけぼの～

この地域でのやきもの生産は5世紀中頃、猿投窯から始まり、7世紀末には焼成時の灰を釉薬とした「自然釉」を用いた生産技術を確立し、本格的な窯業生産が行われたことが分かっています。また平安時代初期には「灰釉（かいゆう）」という木々やワラの灰を原料とした釉薬を用いた陶器が焼成され、これらが日本の陶器のルーツとなります。さらに平安時代後期になるとそれまで高級食器とされていた灰釉から一変して「山茶碗」という無釉の碗や皿といった日用品が量産されるようになりました。

～時代の需要を受けた変化～

現在の瀬戸焼に直結する起源として鎌倉時代初期に窯を開いた陶祖・加藤景正が挙げられますが、この伝説には諸説が入り乱れており、これからの研究・調査が期待されます。室町時代以降、次第に生産拠点が美濃へ移り、瀬戸の生産量が減少傾向を見せる時代がありました。これを「瀬戸山離散（せとやまりさん）」といい、茶の湯が隆盛を極めた戦国時代、織田信長の領国・美濃に多くの陶工が呼ばれたことに起因すると考えられるようです。しかし江戸時代に入り、尾張藩主・徳川義直の保護を受け陶工招致

が起こると瀬戸は再び活気を取り戻します。この動きの中で現在に伝わる名工たちの逸品が数多く生まれました。

～総合的なセラミック産業への発展～

近世以降、瀬戸物は食器以外の素材としても幅を広げ、用いられるようになります。屋根瓦や、明治時代に西洋文化の影響を受けた浴室・便所のタイルといった「建築用材」。高温や強酸など過度な化学実験に耐え得ることに加え、実験結果に影響を及ぼさない無垢な素材であることが要求される「理化学用磁器」。丈夫で汚れにくく、酸やアルカリに強いという特徴を生かした便器・排水口等の「衛生陶器」。第一次世界大戦中、ドイツ製に代わって市場を拡大した置物などの装飾品「ノベルティ」。電気を通しにくい絶縁性を生かした「碍子（がいし・家庭に供給される電気が電線を経る間、放電を防ぐためのもの）」。これらの組織・形状・製造工程を精密にし、新しい機能や特性を持たせた「ファインセラミックス」など、瀬戸はまさに陶磁器の総合的な研究開発、生産の場として位置づけられます。

（参考資料：瀬戸市HP）

瀬戸を丸ごと知ることができる瀬戸蔵

こうした観光事業の拠点施設が、尾張瀬戸駅から徒歩5分の場所に建つ「瀬戸蔵」です。この周辺は、「御蔵会所（おくらかいしょ）」という、江戸時代に陶磁器の流通管理をしていた機関や町役場のあった町の中心地であり、現在、工場・窯・商店等、各施設への司令塔役を引き受ける瀬戸蔵にぴったりの地域です。以前は市民会館があったのですが、リニューアル事業に合わせ、もともとの機能に加え、より人々に親しみやすい施設として生まれ変わりました。

瀬戸蔵内にはアンテナショップ・飲食店・インフォメーションコーナー、観光協会、瀬戸蔵ミュージアム（2・3F）、イベントホール、産業支援センター、会議室などがあり、市民や観光客の憩いと文化交流のための施設としてそれぞれ活用されています。飲食店「蔵所」では尾張名古屋や瀬戸にちなんだ品書きが豊富に用意されています。中でも注目されるのは瀬戸焼の器で出される井ものやデザート類。こちらを注文すると出された器と同じものをお土産として持ち帰ることができます。

昭和時代の瀬戸に迷い込む「再現ゾーン」

瀬戸蔵ミュージアムの入り口を抜けると最初に



館内の案内サインも陶器製

目に飛び込むのが本物の「瀬戸電」。かつてやきものの輸送を一手に担ったこの電車は、落ち着いた緑の車体、板張りの床や青いピロード調の座席がレトロで懐かしい雰囲気をまとっています。瀬戸電の隣には昔の尾張瀬戸駅もジオラマ復元されており、駅舎を通り抜けると、積み荷を置くための集積所、モロと呼ばれる工場、石炭窯、瀬戸物



産業都市瀬戸の要・瀬戸電



再現ゾーンにある工場風景

屋が続き、昭和中期の世界にタイムスリップしたような町並みが見学できます。

ちなみにこの大きな瀬戸電がどのように瀬戸蔵の施設内に収められたのか、プロジェクトの経緯は是非ミュージアムの解説をご覧ください。

瀬戸物の産業をたどる 「ギャラリーゾーン」

再現ゾーンの先にある展示室では企画展用の特別展示室・中央通りギャラリー、また常設展用の生産道具展示室があります。

常設展の生産道具展示室で紹介されているのは、やきものを作り上げる工程で使われる道具の歴史です。技術の進歩に伴い姿を変える機械、また逆に、機械ではなく職人の腕に頼るため廃れることなく引き継がれている道具などが、わかりやすい図解のついたパネルを添えて展示されています。

瀬戸焼の歴史をたどる「瀬戸焼回廊」

3階では「瀬戸3万年の歴史」「瀬戸焼の歩み」と題して、旧石器時代から現代へ続く瀬戸焼の発展を紹介しています。歴史の流れと共にやきものの変遷を見直すと、いかにやきものが生活に密着し、時代の要請に応えながら発展してきたかがよくわかります。シンプルな土器から茶碗等の飲食器へ、時には家具やアクセサリなどの装飾工芸品として、戦時下では金属の代用品として、実にさまざまな局面でそれぞれの用途に合った発展をしています。

回廊の天井からは教科書等でおなじみの浮世絵・屏風絵に描かれたやきものにスポットを当てた垂れ幕が展示されています。

回廊の外へ出ると吹き抜けから2階展示室の再現ゾーンを俯瞰することができ、モロのからくりなど全体像を眺めることができます。

施設の概要

住 所 〒489-0813 愛知県瀬戸市蔵所町1-1

T E L 0561-97-1555

F A X 0561-97-1557

U R L <http://www.city.seto.aichi.jp/>

開館時間 8時30分～21時30分

休館日 年末年始 開催日カレンダー

入館料 無料

(※ミュージアムは大人500円、
高大生・65歳以上300円、中学生以下無料)



やきものの変遷を一望できる瀬戸焼回廊



やきもの歴史はそのまま日本の生活史でもある

インタビュー



瀬戸蔵 まるっとミュージアム課
専門員兼瀬戸蔵係長 春田 義満 氏

—瀬戸蔵の目的、事業開始の経緯についてお聞かせください。

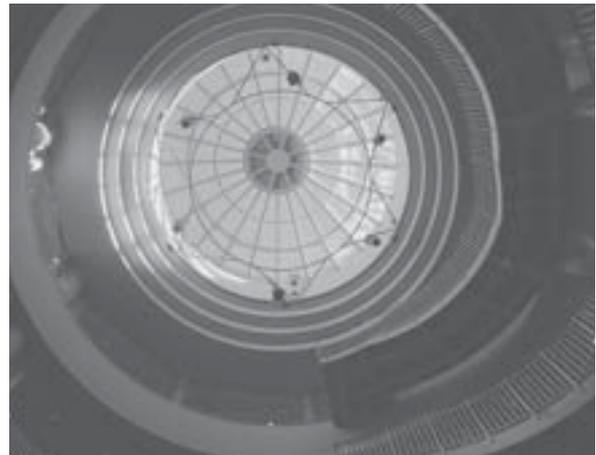
瀬戸蔵が建っている記念橋周辺は、江戸時代、やきものの流通のために価格や免許について管理する御蔵会所という建物が建っていました。その後も町役場や陶磁器陳列館、郵便局などが立地しており、昔からこの町にとって大変重要なところでした。特に瀬戸蔵の建っている場所には以前は市民会館があり、市民の皆さんに利用されていましたが、老朽化のために建て替えの計画が上がりました。この頃、道路整備なども含め町づくりの基本方針としたのが、瀬戸の町全体を博物館に見立てた「せと・まるっとミュージアム構想」です。やきものづくりの歴史の中で残されていたものを観光資源に生かしていこうと、瀬戸蔵はそれらを実現するための中核施設という役割で愛・地球博の開催に併せて2005年3月にオープンしました。

瀬戸蔵という名称は公募で決めました。応募総数156点の中から市民で構成した委員会にて投票により決まったものです。考案者の方は「“蔵”は色々なものが保管されている場所、瀬戸のいいものがたくさん詰まった場所」ということでつけて下さったそうです。

それから瀬戸蔵のシンボルマークですが、真ん中の白い円は陶磁器のイメージ。また観光案内の中心施設であることを象徴しています。その周り



瀬戸蔵のシンボルマーク



建物中央にあるらせん状の吹き抜けが特徴的

を覆う月型の部分がろくろを回す職人の手です。この二つを合わせて、匠や市民のおもてなしの心を表したハートの形になっています。

—施設の内容についてお聞かせください。

施設は一体感のある建物にしたいという思いがあり、「見る、見られる」という設計コンセプトを重視しました。どこで何が行われているのかわかる状況にしていこうということで、真ん中の吹き抜けを中心に、周囲に色々な施設が張りつく、という形になりました。

敷地面積が約8,600ha、1階に店舗関係とインフォメーションコーナー、観光協会が入っていて、2階には瀬戸蔵ミュージアムと350席のイベントホールがあります、3階は瀬戸蔵ミュージアムと特別会議室、産業支援センターが入っています。4階は会議室と多目的ホールがあり、駐車場は有料駐車場が約190台分、観光バスが4台分あります。

お勧めとしては、瀬戸という地域とやきものの総合的な紹介の場となる瀬戸蔵ミュージアムです。収蔵品も多く見ごたえがあると自負していま

す。まず2階に展示された、かつて瀬戸の街中を走っていた本物の瀬戸電。これは人を運ぶことはもちろんですが、ここから出荷されたやきものが堀川、名古屋港を経て海外へ輸出される、産業用鉄道という機能がありました。瀬戸のやきものの歴史とは切り離せない重要な交通です。また、大正時代に作られ2001年に解体された「尾張瀬戸駅」など、瀬戸の町を象徴する町並みを再現しています。3階には約2,000点の資料を陳列した瀬戸焼回廊がありますが、1,000年を超えるやきもの作りの歴史が、古代から順に時代を追ってわかるように展示されています。

瀬戸蔵ミュージアムのコレクションはもともとあった歴史民俗資料館が収集・調査研究していたもので構成されています。所蔵品は1万4,000点ほどあります。

―入場者についてお聞かせください。

昨年度実績で4万5,475人の入場者がありました。傾向として特に中学生以下の社会見学で来る方が多く、小学校の団体見学では年間約60～70校がいらっしゃいます。東海以外からのお客様も多く、大阪など関西方面や北陸方面、長野・静岡からいらっしゃる方もいます。やきもの好きの方が本場瀬戸ならば何でもあるだろうと、欲しいものを求めてお越しになることが多いようです。

祭のシーズンになると外国人のお客様も団体でいらっしゃいます。フランス、ドイツなどヨーロッパ

からの割合が高いように感じます。外国人観光客への対応としては、瀬戸蔵ミュージアムではキャプションを日本語、英語、中国語、韓国語で表記したり、英語バージョンの観光マップを作って配布したりしています。外国人観光客の方に印象に残ったものをお聞きするとよく挙げられるのが、染付焼きで作られた便器です。めずらしく感じられるのだと思います。

―せと・まるっとミュージアムの活動、効果についてお聞かせください。

せと・まるっとミュージアムの取り組みで特に力を入れているのが「7大イベント（陶祖まつり、せとなつイベント、せともの祭、招き猫まつり、まるっと大回遊、陶のあかり路、お雛めぐり）」ですが、イベントの集客は全体で、2006年が80万人、2007年が100万人。イベントの中でも古くからあり知名度の高い陶祖まつり・せともの祭も年々増加傾向にあります。集客以外の効果では、愛知万博以降、活動が盛んになった観光ボランティアが挙げられます。観光客を積極的に迎え入れ、案内しようということで「おもてなしボランティア」と呼んでいます。そのような市民一人ひとりの意識の向上が、より外へ向けた情報発信力を高め、更に観光客を呼び込むことにつながると考えています。ただ、観光客の増加に比例して、ニーズも多様化します。やきものに造詣の深いお客様に即座に対応できるソフト面の強化も必要になってくると感じます。

―他の陶磁関係の施設や、周辺の観光施設との連携は行われていますか。

瀬戸蔵ミュージアムではシーズンごとに企画展をしています。先ごろ、県の陶磁資料館、豊田市民芸館、豊田中央図書館との4館共同企画として、FM愛知の元会長・本多静雄さんの個人コレクションの展覧会を行いました。

市内の施設では置物などの装飾品・ノベルティのテーマ館の「ノベルティこども創造館」、伝統技法の瀬戸染付をテーマにした「マルチメディア



意匠を凝らした染付の便器

伝承工芸館」とも連携を図って、各館の研修生に来てもらい瀬戸蔵ミュージアムの中で実演コーナーを設けてイベントを行ったりしています。

―地域における役割、貢献についてどのようにお考えでしょうか。

瀬戸蔵はせと・まるっとミュージアムの拠点施設なので、瀬戸の産業観光をセールス、プロデュースする役割があると強く感じます。また瀬戸市内には公共・民間問わず多くの観光施設がありますが、瀬戸蔵を中心に各施設へ見学経路を設定したり、各々の施設単体では対応しきれない、団体受け入れのフォローをしたりしています。

―瀬戸市産業観光へのご意見をお聞かせください。

瀬戸の魅力をもっとアピールできる材料となるモノや、職人さん、やきものづくりに携わる中で様々な知識を持っている方が、まだまだたくさん埋もれていると考えています。そういうモノや人的資源を見つけ出し、活用して情報発信していけたらいいと思います。それらを実践するための支援体制を先ほどのような他の施設との連携事業の中で進められればいいと考えています。

また、広報活動として色々なメディアを生かしたPRは欠かせません。現在ではイベントをメインにPRしていますが、他にも瀬戸の産業観光を、旅行会社を通してPRしたり、名古屋商工会議所と共同して県外の旅行会社へ行きバスツアーとして売り込んだりしています。こうした広報活動をもっと盛り上げたいです。

―今後の抱負や方向性、課題等についてお聞かせください。

年々増加して多くのお客様がいらっしゃいますが、そのほとんどが日帰りです。これからは日帰りの方だけをターゲットにするのではなく、長期滞在をしてじっくり瀬戸の魅力を知っていただけるような仕組みや施設ができれば、と考えています。また、名古屋で観光される方に瀬戸にも足を伸ばしていただいて、瀬戸からさらに他の地域へ足を

伸ばす、という観光ルートの足がかりになるような地域、そういう一端を担えたら、と思います。

また、小学校の総合学習・社会見学にも生かしてもらえる資源ですから、より一層の呼びかけを図りたいと考えます。

先ほど愛知万博について触れましたが、万博会場となったことでここ数年ハード面の整備が進みました。瀬戸蔵自体もそうですし、再開発ビルや道路も整いました。それに加えて観光ボランティアに代表されるソフト面も変化しました。これまではものづくり一本でやってきた職人の町でしたが、それを発信する、外へ向けた働きかけをするようになってきました。例えばある陶磁器メーカーでは廃業した大きな製陶工場をそのまま活用して、社長の磁器のコレクションを紹介するという、見学施設を兼ねた美術館にされました。そのような意識の高まりを今まで以上に継続、充実させることができたらいいなと思っています。